

RA研究会セッション

「研究支援学」は可能か

(パネリスト)

澤田芳郎・馬場大輔・原田隆・山田光利

趣旨

およそ現象が存在するところ、それは研究の対象になる。我々URAが従事する研究支援も例外ではないが、それが「学」を名乗るには意見交換しようとする複数の人間が必要であり、おそらくは職務の一部としても認められなければならない。すると問われるのは学としての存在意義である。

本セッションでは趣旨説明に続き、各パネリストから各自のテーマに関するプレゼンを得たうえ、研究支援学の領域やアプローチを検討して、この問題を考える。研究支援学がURAの認識や行動をどう支えるかも深めたい。

● プレゼンテーション

- 産学連携の分化とコーディネータ(澤田芳郎＝司会)
- 研究マネジメントについて(馬場大輔＝司会)
- URAの責任と職業倫理(原田隆)
- 研究機能が分散する社会を想う(山田光利)

● ディスカッション

- セッションのテーマは「研究支援学の学としての存在意義」だが、抽象的に考えるだけが検討方法ではない。
- むしろ各自のテーマを掘り下げ、フロアとの、あるいはパネリスト相互のディスカッションを通して何か見えてくるよう努めたい。「意見交換」を先行させることで、研究支援学をシミュレートする。